

初霜や短く剪りし妻の髪

霜くすべ夜々匂ひけり高嶺星

涅槃雪あさ一包の粉ぐすり

年暮るる辞典の上の鍵の束

放哉と猫一匹のほか桜

春雨のけふは音あり女身仏

むさし野のあさがほあをき神学校

飛魚干あごしてどの子も齋の切支丹

雨のいろ水のいろにもあめんぼよ

豚の尾の巻いて一村青嵐

寒立馬冬の虹より降り立ちし

葉のうへに葉のかげ灼けて重なれる

めまとひよアフリカ象は大きかる

影ひとつとはに過ぎゆく白日傘

白山の水まぶしかる山椒魚

すこしだけいちぢわる雨の虚子忌なり

瓢箪のくびれ一向衆のこゑ

雲海を抜き国引きの山明り

一枚の遺書一枚の水の秋

おやつです隷書のやうな冬籠

浮世絵の雨の一刷きななかまど

足らふてふこと麦秋の真つ只中

夜間飛行青水無月の列島へ

紙漉くや水もてひかり掬ふごと

万愚節みどりの壇のハイネケン

ヒト老いてカナリヤを飼ふ冬星座

二十四のくれよんのいろ十二月

聞くだけのラジオ体操えごの花

冬の菊わが墓誌銘を読むこころ

丸餅やむかし因幡のしろうさぎ